小学校教員のキャリア教育への意識向上とその効果
～教員研修と授業実践を通して～

鍛治　真知子

【キーワード】　小学校教員　キャリア教育　キャリア発達　キャリア教育の視点

【要旨】

筆者は、小学校教員の意識が「クラス担任のこの一年間だけ」「小学校在籍時に限定」といった目先の指導にのみ置かれているか、小学校卒業後の中学・高校・大学・社会に出て働くことまでをも見据えて「生きていく上で必要な力を育てる」という所に置かれているかでは、児童に育つ力や能力に違いが現れるのではないだろうかと考えた。義務教育修了までにすべての子どもに自立して生きていくための基礎を育てることが求められている今日、小学校におけるキャリア教育に着目し、児童のキャリア発達を促す関わりや、そのための教材、学校の取組について見直す必要があると思われる。

本研究では、教育活動、とりわけ授業実践の場においてキャリア教育を進めることを目的とした教員研修を計画・実施した。留意したのは、教員がキャリア発達に意識を置きながら、児童と関わることの大切さを理解することである。さらに、その効果を教員の意識変化と実際の授業における教員の児童への関わりから検証した。

小学校教員が、互いにブラッシュアップし合いながら、児童のキャリア発達を促す教育活動を目指し、《主体的に取り組み、自ら気づく》内容の教員研修を、次の３点に着目して３回行った。①自己のキャリアをふり返り、人生を生きていく上で大切にしていることを自身に問いかけ、キャリアの大切さを実感する。②個人の活動、並びに互いに意見を交流する場面を多く設定し、児童の実態を踏まえた上で、キャリア発達につながる関わりを探る。③研修におけるさまざまな活動から児童のキャリア発達や個性の伸長につながる教育活動のあり方を探り実践に繋げる。

研修後、キャリア教育を意識した教員の「児童の学びを、身の周りから社会に、そしてもっと広い世界に目を向ける」ことを大事にした働きかけが進められている。それらは、児童の知的好奇心を喚起し、学びと自分の夢や将来との繋がりを意識させるに至り、今の学びの重要性・必要性への理解を促進させている。

このような実践を通して、キャリア教育への小学校教員の意識向上が見られた。教育活動におけるキャリア教育の一事例を示すことができたと考える。今後もキャリア教育の充実に繋がる教育実践を重ね、小学校におけるキャリア教育の推進に努めたい。

Ⅰ　はじめに

中央教育審議会(2011)は、今の子どもたちに必要な力のひとつとして、「基礎的・汎用的能力」をあげ、細かくは、人間関係形成・社会形成能力 、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力であるとし、キャリア教育の大切さについて指摘した。また、キャリア教育における外部人材活用等に関する調査研究協力者会議(2011)は《キャリア教育》を「子どもたちが、社会の一員としての役割を果たすとともに、それぞれの個性、持ち味を最大限発揮しながら、自立して生きていくために必要な能力や態度を育てる教育である」とし、重要視している。小学校におけるキャリア教育の目標として、「自己及び他者への積極的関心の形成・発展」「身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上」「夢や希望、憧れる自己イメージの獲得」「勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成」(国立教育政策研究所生徒指導研究センター, 2009)が挙げられ、その達成が求められている。これらの目標をみると、学校現場全体がキャリア教育の場所であるという考えのもと、教員自身の意識改革をすることの必要性が今問われているように思われる。

キャリア教育に関わる活動を行おうとしている、また実際に行っている小学校教員もいることは事実であるが、前期義務教育の段階にある小学校においては、概してキャリア教育に対する小学校教員の意識が高いとはいえない(文部科学省,2011)。子どもと関わるさまざまな場面(教科指導・生徒指導・部活動・行事・学級経営等) における教員のかかわり(声かけ・つぶやきに対する言葉・態度等)が、児童のキャリア意識を高める機会となることから、子どもとの日常的な関わりにすぐさま応用したり、活用したりできるキャリア教育に関する研修が求められるところである。特に筆者の関心は、教員がキャリア発達に意識をおきながら児童と関わることであり、本研究では、教員研修を通して、参加者が児童のキャリア発達を促す教育活動について考え、実践につながることを目指した。

まず教員のキャリア教育に対する意識調査を行い、それらを、研修内容を考える基本材料とした。その上で、参加者に自己のキャリアをふり返り、生きる上で大切にしていることを自ら問いかけ、キャリアの大切さを実感してほしいと考えた。参加者が《主体的に取り組み、自ら気づく》研修内容とし、それを児童の実態を踏まえた上でのキャリア発達につなげることを試みた。研修における活動により、児童のキャリア発達や個性の伸長につながる教育活動の実践を図り、教員の意識の変容を検証する過程を通して成果を共有することをめざしたい。

Ⅱ　小学校におけるキャリア教育の現状と背景

１．教職員のキャリア教育の必要性

「キャリア教育は様々な教育活動を通して実践されるものである」（中央教育審議会,2011）と述べ、キャリア教育における外部人材活用等に関する調査研究協力者会議(2011)は、キャリア教育そのものが、「キャリア教育の全体計画や年間指導計画の下、学校教育全体で行われていくもの」であり、「教科横断的に進めていくことが効果的」としている。しかしながら、「教育委員会や学校の計画等の中にキャリア教育について示されていないケースがあり、教育委員会や学校全体でキャリア教育を推進していくことが明確になっていない場合が見受けられる」のが現状である。さらに、「学校におけるキャリア教育を進めていく主体となるのは、やはり子どもたちに毎日接している学校の教職員である」と示唆しており、『教職員のキャリア教育の必要性に対する意識の醸成』が求められている。

キャリア教育に対する考えとして、「提唱されている内容どおりに現場が取り組むとしたら、教員の負担は相当大きくなりそうだ」、「学校現場で浸透するかどうかは未知数」また、基本的な理解が十分に進んでいない状況も見受けられ、「進路指導や職業教育と『キャリア教育』の違いがわからず、主旨が見えない」や「『キャリア教育』の意味がわからない」(リクルート,2010)などの指摘もあり、このような現状を踏まえると教員のキャリア教育についての理解を、より一層深める必要があることがわかる。

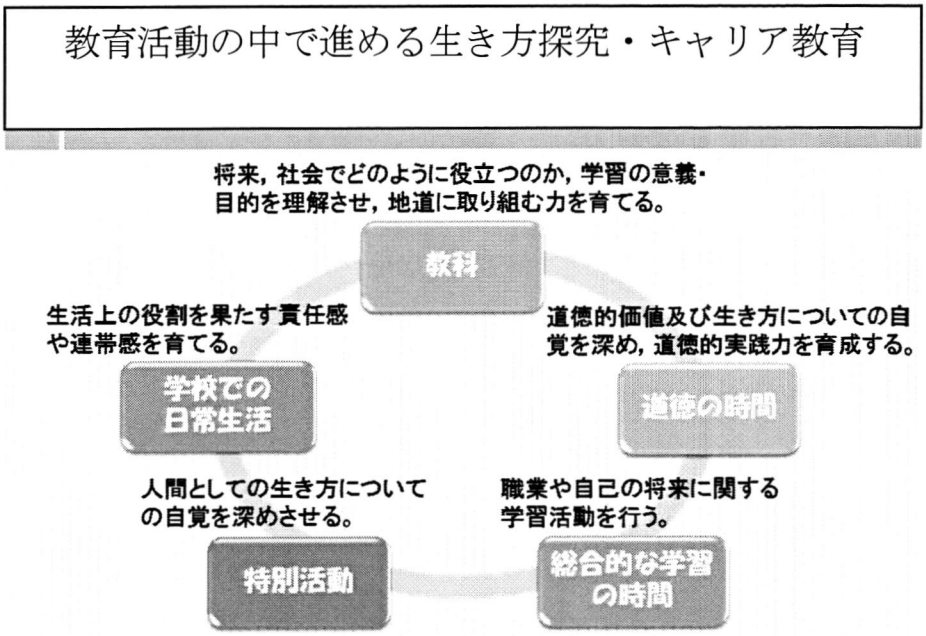
「教員にとって負担感が大きいのは、キャリア教育を誤解しているからであるとの見方もある。今既に行っている様々な教育活動、例えば、教科教育や生徒指導の中にもキャリア教育の断片がいくつもあり、日常の教育活動の中でも見方を変えることでキャリア教育を行うことができるということを再確認することが重要であろう」(キャリア教育における外部人材活用等に関する調査研究協力者会議,2011)。校内で実施したキャリア教育に関する取組で、「キャリア教育についての教職員を対象とした校内研修会の実施」を選択した学校は、小中高ともに20%を下回っている（文部科学省,2011)。

また、小学校における全ての教育活動においてキャリア教育に取り組もうという意識はあまり浸透していない。とくに、教科におけるキャリア教育の取り組みは、モデル校や研究校においても実践例が少ないのが現状である(国立教育政策研究所,2010)。

筆者はこれらの現状から、小学校教員へのキャリア教育に関する研修の機会を設定し、小学校におけるキャリア教育の理解と教員の意識向上さらにはその浸透を促し、教育活動の場での実践を目指すことが必要だと考えた。

２．Ａ市の取り組みの実態

A 市には〈学習と生活をつなぐ・学校と社会をつなぐ〉をキーワードとした他都市には見られない独自の体験を伴う学習プログラムがある。



また、《研究会》がチームとして構成され、教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間等の指導案を作成し、小学校教員が実践活用できるよう協議検討をすすめている。しかしキャリア教育の視点を取り入れた教科学習における授業実践の事例は、A 市のみならず全国的に見てもその数が少ない(文部科学省,2010)。そのため小学校教員に〈キャリア教育〉の理解やキャリア教育の視点を踏まえた授業実践の在り方・方法があまり浸透していないという現状が見られる。

A 市総合教育センター研究課(2011)は、市立小学校のキャリア教育主任を対象としたアンケート調査を行いその結果を報告している。その中の「生き方探究教育に関わる研修においてどのような研修内容が必要ですか」の設問に対して、A 市の主任教員は、「教科におけるこの教育の具体的な実践方法」に 75%、「この教育の考え方や理論」に 61%が必要だと回答している。A 市における教員は、キャリア教育への学びを深めたいという考えをもっているという傾向が伺える。

3．A 小学校（筆者の本務校）

（1）A 小学校の概要

児童数: 459名　学級数: 17学級(育成学級1含む)　教職員数: 28名（常勤講師2名含む）

特色ある取組： 放課後学び　クリーン大作戦　百人一首の会　図書ボランティア

地域性： 学校が地域のコミュニティセンターとしての働きを担っており、教育活動全般にわたる理解と協力を得て、地域ぐるみの学校行事や取組を多く行っている。

（2）A小学校の研究課題

平成2X年4月末研究部から平成2X年度研究構想の概要が提案された。研究主題は、『自ら考え進んで表現する子を育む～伝え合う楽しさを味わえる授業をめざして～』である。研究の柱として、①授業改善、②言語活動の充実、③読書指導の充実 がたてられ、その中に本年度初めてキャリア教育の研修と研究授業(兵庫教育大学大学院との共同研究)も位置づけられた。ただし、キャリア教育は初めての取組であり、どのように教員の意識を向上させキャリア教育を進めるのか考える必要があった。

Ⅲ　本研究の目的

1．目的

これらの現状から、A小学校においてもキャリア教育の研修を実施し、小学校教員のキャリア教育に対する意識向上と学校教育への展開を進める必要性があるということがわかる。本研究では、キャリア教育に関わる研修を通して教員が小学校におけるキャリア教育の在り方を共通理解するとともに、学校教育全体の場(特に教科教育)での実践の在り方を探り、その過程において教員自らの意識の高まりを目指した。本研究の目的はこれらの実践を通して次の(1)～(3)の検証を行うことである。

（1） 小学校教員に向けた教員研修プログラムを作成し、研修を実施する。

（2） キャリア教育の視点を取り入れた授業（教科学習）を計画・実施する。

（3） これらの取組がA小学校にもたらした効果を検証する。

2．方法

研究目的を達成するため、次の(1)～(5)の手順を踏むこととした。

（1） キャリア教育についての意識調査を行う。(H2X-1年10月)

（2） 教員がキャリア教育の必要性について理解できる内容をもった校内研修会を実施する。(第1回研修 H2X年7月)

（3） キャリア教育の視点を教科に取り入れた指導案を参加教員が作成する。(第2回研修 H2X年8月)

（4） キャリア教育の視点を教科に取り入れた授業実践と事後検討会を行う。(第3回研

修 H2X 年 11 月）

（5） 3 回の研修による効果の検証を行うために、研修参加者のアンケート、インタビューを行う。授業実践の内容については、キャリア教育の視点を取り入れた指導案と授業内容その様子を観察・記録しこれらを分析する。本研究の成果の検証は、次の 3 点を通じて行う。

① 研修前後に行った研修参加者によるアンケートを分析した結果と、研修中における資料への記述や研修後のキャリア教育に対する具体的な記述（ふり返りシート）からその変容を捉える。

② 授業における教員の支援と手立て、そこに見られる児童の発言や様子からキャリア教育の視点と授業の関係性を明らかにし、本授業事後検討会の発言記録とからキャリア教育についての教員の意識を明確にする。

③ 取組全体を通じて研修参加者のキャリア教育に対する必要性の理解と授業実践することの意識がどのように変化したのか、アンケート、インタビュー、授業実践の指導案・授業内容・子どもの様子等のデータから分析し検証する。

Ⅳ　A 小学校におけるキャリア教育に関する教員研修

1．研修の概要

キャリア教育は、子ども・若者がキャリアを形成していくために必要な能力や態度の育成を目標とする教育的働きかけである(文部科学省,2011)。筆者はこのようなキャリア教育の特質より、小学校教員が主体的にキャリア教育に取り組むことができるような内容の研修を計画し実施することが大切であると考えた。そこで、教員自身が自らキャリア教育が必要だと感じる研修内容とし、自分自身のキャリアを振り返ることで児童への教育活動に影響を与えるという共通理解を持つことを目指した。

加えて、キャリア教育の実践例を参考にしながら、さまざまな学校教育活動とキャリア教育との繋がりを確認し、これまでに取り組んできた教育活動や実際に行っている教科学習の内容を見直し、キャリア教育の視点を大切にした教育活動について考えるきっかけとした。そこで、自分自身のキャリア（生きてきた自分史）をふり返ることを研修のスタートとし、教師だからこそできる児童の将来の物の見方や生き方につながる教育活動へのアプローチの仕方を探索した上で、実践の場へ繋ぐ内容とした。研修プログラムの中で、研修参加者が意見交換し、考えを共有することを通して、教員同士の相互作用を促し、《キャ

リア教育を意識した教育活動の実践を行うことができる》という目標の達成を目指した。

2．研修実施にむけて

（1）教職員のキャリア教育に関する意識調査（平成２X－１年10月事前アンケート）

研修に先駆けて、教職員のキャリア教育に対する意識を調査することとした。アンケートを実施し26名中20名（教職経験1年～35年）から回答結果が得られた。

結果を以下にまとめる。

① 『キャリア教育』から連想すること；

職場体験・勤労意識など仕事に関すること	8名
子どもに対する教育（生きる力の育成や人づくり、自立した姿に向け今を考える機会を与える）	6名
生涯にわたる教育である	6名

② キャリア教育』を進めるために今行っている取組；

職業体験・体験学習を行っている	6名
子どもたちにあいさつ・自分の役割や責任を果たすように促している	6名
特に何もしていない	6名
自己研鑽・研修会参加	2名

③ 子どもの頃自分の将来をどう考えていたか；

具体的になりたい職業があった	10名
特になかった	10名

④ 自分の体験はキャリア教育に活かせるか ；

活かせると思う	4名
バイト経験は活かせる	4名
あまり思わない	4名
自分のためになっても人のためになるか分からない	2名
学習指導が第一（キャリア教育を体験学習と捉えている）	2名
特に活かせない	2名
無回答	2名

⑤ 子どもたちに生きる力をつけるために何を大切に日々の教育活動を行っているか

自分で考え判断し行動する	12名
基本的生活習慣	6名
前向きに考える力や自信をつける	4名
言語力・勇気・共働	1名
世の中を知ること	1名
興味関心が持てるように声かけ	1名

（2）教職員のキャリア教育に関する意識調査から見えてくること

この結果から、小学校教員のキャリア教育に対する捉え方に違いがあること、またキャリア教育を進める取組に差があり、何もしていないと回答する者がいることもわかった。また、自分の体験がキャリア教育に活かせると考える者より、そうではないか、もしくは分からない、と考えている教員の方が多いことも明らかになった。加えて、生きる力をつけるための教育活動がまちまちであり個人差があることも窺える。キャリア教育について

のイメージがそれぞれ違うことや、キャリア教育は大切だと思うが具体的な方法が分からないという意見もあった。

これらの現状を踏まえると、A小学校の教員が1つのチームとしてキャリア教育を進めるために、まずキャリア教育を共通理解し、個々の教育活動の在り方を見直すことが必要である。研修過程においてキャリア教育に対する教員の意識が自然と向上し、自分のキャリアを活かしたオリジナルなキャリア教育を行うことができるようになることが望まれた。

3．第1回研修（H2X年7月）の内容　(Appendix 1　第1回研修スケジュール)

キャリア教育に関する意識調査の結果などから、まず教員自身のキャリア教育への意識向上が必要だと考え研修計画を立案した。第1回研修では、ねらいと目標を提示、実習としてキャリアレインボーシートの作成と話し合い、さらに価値観カードを使った自己理解を行うこととした。実習を通じて自分が人生を生きていく上で大切にしていることを再確認し、児童が人生を生きる為に大切なこと・必要な力について共通理解した。最後にキャリア教育の基礎的･汎用的能力と受講者が共通理解した児童の実態から見た必要な力との関連について理解を深めた。

それぞれの内容について以下に説明する。

（1）研修オリエンテーション

参加者に本研修のねらいや学習目標・行動目標（Appendix2）を示し、共通理解をもって研修を進めた。次に、各個人の研修目標設定を求め、各自がレジュメに記入した。学習目標・行動目標を達成するために、①受講者自身のキャリアを振り返り、人生にとってキャリアを考えることがいかに有意義なことであるかを実感し、キャリア教育を児童に行っていく必要性に自ら気づく　②実感し気づいたことを、キャリア教育を進める中で、どのように児童に伝えていくかについて工夫する、というプロセスを経る研修であることを強調した。

（2）自分自身の人生をふり返ってみよう

本研修では、自分の人生をふり返り、人生の中で自分がどのような役割を果たしているのか、また、キャリアというものがいかに大事かということに自ら気づくという研修内容を採用するため、ライフキャリアレインボー（Nevill&Super, 1986）を活用した。スーパーは、キャリアは生涯にわたって発達し変化するとし《人生のある年齢や場面の様々な役割の組み合わせである》と定義した。そして、人生における役割を、子ども・学生・職業人・

配偶者・家庭人・親・余暇を楽しむ人・市民・年金生活者の９つと示し、この概念をレインボー(虹)に例えた図に示すキャリアレインボーを考案した。

ライフキャリアレインボー(Appendix3)の作成を通して、参加者自身のキャリアをふり返り、これまでの生き方を見つめ、自身のキャリア、夢や希望、人との出会いが人生にどのような影響を与え、今の自分と繋がっているか、レジュメの吹き出し部分に書き込んで整理することを求めた。キャリアという視点でさまざまな事象を捉えることや、キャリア教育という視点を持って児童の教育活動を考え実践する上での、第１段階である。

（３）価値観シート

次に、実習「価値観シート(Appendix４)で自己理解を深める」を行った。自分自身のキャリア形成において、大切にしていることや必要だと感じていることについて、価値観を表す 65 の単語や言葉を元に再確認し整理した。

（４）子どもたちへのメッセージ

学校教育の中で大事なことは、受講者が気づいた自分自身のキャリアに対する意識や実感を実際にどのように教育実践につなげていくかという視点である。そのために、参加者の視点を自己（教員自身）から他者(児童）にスライドさせることが必要となる。自分自身にとってのキャリアを考えるという観点の重要性を、子どもたちへつなげるというメッセージとして記述した。

（５）目の前の子どもたちを見つめて

次に、A 小学校の児童の実態をふり返り、児童に必要な力・育みたい力について各個人が付箋に書き出した。児童の実態について各人が記述することによって、日常の児童の行動や言動を思い起こし、ふり返り、見つめ直す機会とした。

話し合いの場で、児童を捉える新たな視点を発見したり、同じ認識であることを共通理解したりすることができた。

（６）子どもたちに必要な力、育みたい力 (Appendix5)

(5)の個人活動の後、グループ活動に移った。意見を共有する方法として、内容をカテゴリーごとに分類する KJ 法を用いた。最後に、筆者が**キャリア教育の定義**※（中央教育審議会,2011）について説明し、グループでまとめられた《子どもたちに必要な力・育みたい力》との照らし合わせを行い、内容を確認し研修を終えた。

※「キャリア教育は、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」「基礎的・汎用的能力として、人間関係性・社会形成能力、自己理解・

自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力がある。キャリア教育の「視点」は、将来の社会的自立・職業的自立を念頭に置きながら、子どもたちの成長や発達を促進する見方を持つことである。」

４．第２回研修（H2X 年８月）の内容　(Appendix6　第２回研修スケジュール)

第１回研修では、自分自身をふり返り、キャリアの大切さを認識した上で、児童にキャリア教育を行う必要性を実感できる研修を企図した。このような教員のキャリア教育に対する意識の向上をもとに、第２回研修では、キャリア教育で育みたい力と教科学習における実践内容を繋ぐ役割を果たすための指導案を作成した。

前半では個人活動とし、第１回研修で見えてきた児童につけたい力を明確にした上で、新たなキャリア教育の視点を取り入れて従来の指導案を見直した。後半は各学年のグループワークとし、児童の実態を共通理解し、授業実践する教科選択とキャリア教育の視点を加えた新たな指導案作りを行い、第３回研修へ繋いだ。

（１）研修オリエンテーション

研修資料として、第１回の研修内容とグループ内で作成された成果物を入れた新たな資料を配布した。研修資料を基に、第２回研修を初めて受講する者を含む全員で、第１回研修を振り返り、続いて第２回研修のねらい(キャリア教育について理解したことを授業実践に繋ぐための指導案作成)についての説明を行った。

（２）指導案の例示

筆者が他校の取組や実践例を参考に作成した「キャリア教育の視点を加えた指導案の一例」を提示した。受講者が興味を抱き知りたいと考える《どのようにして子どもたちに教科の中で基礎的・汎用的能力を育成するか》を、従来の指導案内容と比較しながら、次の指導案作成も視野に入れた説明を行い、理解を促した。

（３）指導案の作成

①［個人活動］

受講者が過去に実践した（キャリア教育の視点が含まれていない）指導案を見直した。その際、次の２点について留意するよう伝えた。

ｉ）児童の実態を踏まえた上で育みたい力を考えキャリア教育の視点を取り入れる

ii）学習活動の見直しを行い新たな学習活動の支援と手立てを考える

②［グループ活動］

個人活動で作成した指導案をもとに、学年団による授業実践を想定し、キャリア教育の視点を入れた指導案作成を行った。

（4）ふり返り

各学年でキャリア教育の視点を入れた指導案について報告があった。その際、①児童の実態からつけたいと考える力 ②教科・領域 ③工夫したところ・見どころ(学習活動の工夫・改善点)が示された。受講者全員で内容を共有し、共通理解して第2回研修を終えた。

5．第3回研修（H2X年11月）の内容（Appendix7　第3回研修スケジュール）

第1･2回研修を通して作成した指導案をもとに、6年生担任によるキャリア教育の視点を算数科に入れた研究授業と事後検討会が行われた。

（1）キャリア教育の視点を取り入れた指導案（6年算数科　体積）(Appendix8)

指導案にキャリア教育の視点を入れるにあたり、新たな観点として、「キャリア教育の視点とめざす子どもの姿(Table1)」「キャリア教育の視点における支援と手立て(Table2)」を示した。

Table1　キャリア教育の視点とめざす子どもの姿

【人間関係形成能力】 めざす子どもの姿	・自分の考えを、相手意識をもってわかりやすく説明している。 ・交流を通して課題についての友だちの考えを聞き、自分の意見に生かしている。
【自己理解能力】 めざす子どもの姿	・自分のしたいこと、できることを理解し可能性を信じて行動する力・今までの学習をもとに、可能性を信じて課題に向かっている。
【課題対応能力】 めざす子どもの姿	・単元の学習の見通しをもち、適切に課題を設定している。 ・課題を分析し、適切な計画を立てて、その課題を解決している。 ・学習をふり返り活動の見通しをもって課題に向かって主体的に取り組んでいる、

Table2 キャリア教育の視点における支援と手立て

◆①課題解決の見通しがもてていない児童には、２つ分を組み替えると直方体になることが視覚的に捉えられるように立体模型を準備する。（→自分の力で課題解決に向かう力を育てる）

◆②課題解決に必要な既習内容の定着が十分でない児童には、必要な内容が確認できるように公式を側面掲示する。（→自分の力で課題解決に向かう力を育てる）

◆③全体では発言する自信をもちにくい児童が、グループで話すことで自信を持てるようする。
（→人間関係形成と自己効力感を高める力を育てる）
自己効力感…やれる、じぶんでできる

◆④自力解決の時間では解決ができなかった児童には、友だちの意見を近くで聞くことで、解決の見通しをもつことができ、集団解決の時の理解につながるようにする。
（→人間関係を形成し課題へ対応する力を育てる）

◆⑤学習内容と実際の生活と少しでも繋がるようにする。（→既習の力を応用し課題に対応する力を育てる）

６年生学年団は算数科単元《立体の体積》を取り上げ、全５時間の指導計画を作成した。

本授業は、その第２時にあたり「角柱の体積の求め方」を考え公式を導く学習内容である。Table3　授業の流れは、前時復習･本時学習・ふりかえりの３点にまとめられる。これらのうちTable3【ⅱ)課題設定】【ⅴ)グループ交流】は授業者が今回算数科で初めて取り入れた学習活動であり、ⅳ)ⅴ)ⅶ)の過程にTable2【キャリア教育の視点における支援と手立て】が意識的に加えられた。

Table3 授業の流れ

ⅰ)前時復習	学習内容がまとめてある掲示物を活用した既習学習の確認。	
ⅱ)課題設定	子どもたち自身による「本時の学習めあて」の設定。	
ⅲ)課題把握	「底面が直角三角形でない三角柱の体積を求める」課題の把握。	
ⅳ)自力解決	一人で課題に向き合う学習活動。	(Table2 ◆① ◆②)
ⅴ)ｸﾞﾙｰﾌﾟ交流	三角柱の体積の求め方について自分の考えを説明する学習活動	(Table2 ◆③ ◆④)
ⅵ)集団解決	教科のねらい(どんな角柱でも三角柱に分けて考えることにより「底面積×高さ」で求められる)を達成。	
ⅶ)ふり返り	気づきや次時で学習したいことなどノートに記述。	(Table2 ◆⑤)

（2）事後検討会における研究協議

授業者と授業参観者(全教職員)による事後検討会が行われた。授業者Ｂから「児童は算数に対して苦手意識を持っており、自分の考えに自信を持てず積極的に学習活動に参加しようとする様子があまり見られない」という実態と、今回キャリア教育の視点を取り入れた授業において大切にしたこととして「『やればできる』を児童自ら実感し、次の学習意欲に繋げることと、今の学びが社会と繋がっていることや自分の将来に役立つことに気付けるようにすることである」という思いが述べられた。

事後検討会では、次の２点を中心に研究協議が行われた。

１．児童自身が考えた【ⅱ)課題設定】の活動は、
　　子どもたちの課題発見能力を育てるのに有効であったか。

教員が《つなぐ》を意識した児童による学習めあての設定は、「既習学習で何を学び、本時で何を学びたいかを明確にする活動である。加えて、めあて達成に向け一人一人が主体的に学んでいる様子が、発言や態度にも見られた」という意見が出た。課題設定に主体的に関わっている姿や教員の手立てが支援となり課題解決に向かう様子が見られたことから、「課題設定において、児童がめあてを見つけることは課題発見能力を育てる。加えて、自分が立てためあてを達成するために、課題に意欲的に向き合い思考し解決しようとする様子から、課題対応能力も自然と育ってくると考えられる」ことが意見としてまとめられた。

２．算数授業でこれまで取り入れてこなかった【ⅴ)グループ交流】の活動は、
　　人間関係形成能力を育てるのに有効であったか。

グループ交流では、まだ理解に至っていない子に図やノートを指し示しながら丁寧に説明する姿や、自分の考えを伝えることが苦手な子を焦らせることなくじっくりみんなで待ってあげる光景が見られたことなどから、「他者を受け入れる思いやりの姿勢を育てることは、他者関係の改善に繋がり、それがキャリア発達に好影響を与える」と意見がまとめられ、「グループ交流は人間関係形成能力を育てることに繋がる１つの方法として有効である」ことが共通理解された。また、授業者が育てたいと考えた能力以外にも「多くの能力が共に形成される」との考えに至った。

キャリア教育を行う際に大切なこととして「児童の課題を解決する方法や、思考の流れ、相手を意識した説明という点も、キャリア教育の視点になる」「キャリア教育の視点を意識して実践に繋ぐことが大切であり、意識しない場合と比べると、児童に育つ力や能力に差が出てくる」「児童に対する支援の在り方を大事にしたい」などの意見が述べられた。自分が考えるキャリア教育について、「社会に出た時に児童が困らない力を必要最低限つける」「話し方・聞き方、学習規律、言葉遣いなども含めた指導がキャリア教育」「今の学びが、社会に出て役に立つと再認識した」「キャリア教育の実践が必要である」などがあった。

一方では、「自分が考えているキャリア教育やキャリア教育の視点というものが、実際に正しい捉え方であるのか不安だ」という声もあり、指導主事に意見を求めた。

指導主事は、キャリア教育を行う上で大切な事として「児童の教室での学びを社会の事象と繋ぐこと、つまり学習したことが生活に活かせることや自分の身の周りにあるものと繋がっていることに気づかせる」ことを挙げ、本授業と関連づけて『算数の体積・容積の学習を生活や経済に結びつける』として社会における様々な具体例を示した。本授業において『三角柱のビルや六角柱の形状をしたお菓子のパッケージの体積も量ることができる』という児童の気づきが授業中に発表されたことを評価し「どの教科にもこのような視点を加えるよう意識してほしい」と指摘した。

V　研修への受講者評価

研修前･後アンケート・ふり返りシートの記述をもとに本研修への評価をまとめる。

１．研修前後における受講者（18名）のアンケート結果

Table4 の[前→後]の数値は、質問項目に関する４段階評価を点数化し合計したものの平均値の推移を表している。

Table4 研修前・後アンケート（前→後）

設問①キャリア教育について興味がある	2.9 → 3.2
設問②キャリア教育は小学校段階において必要だと感じる	3.1 → 3.6
設問③キャリア教育の視点を入れて授業を進めることが大切だと思う	2.9 → 3.6
設問④キャリア教育の取組や実践例を知っている	2.2 → 2.4
設問⑤自分のキャリアを振り返ることは、これからの人生を豊かに生きることにつながる	3.0 → 3.3
設問⑥自分のキャリアを教育活動に生かすことは大切だと思う	3.2 → 3.4
設問⑦学校における教育活動がキャリア教育に結びつくと思う	3.1 → 3.6
設問⑧平成２３年１月中教審（答申）で示されたキャリア教育で育成すべき力を知っている	2.1 → 2.8

2．第１回研修ふり返りシート（14名）の記述内容

第１回研修(自分の人生をふり返り、キャリアの大切に気づき教育活動へ活かすキャリア教育についての理解)ふり返りシートの記述を整理する。

ライフキャリアレインボー作成に関する内容

・人との関わりやさまざまな経験、大きな決断をしたことを思い出した」	6名
・「いろいろな役割を果たす自分に気づきこれからの人生をどう生きるか考える機会になった」	4名

グループ活動における意見の共有と共通理解に関する内容

・「児童理解の異なった視点や、他の先生の子どもたちへの思いを知ることができた」	5名
・「子どもたちにつけたいと思っていた力をみんなで整理するとキャリア教育に繋がっていた」	4名

研修のねらいと関連する内容

・「キャリア教育とキャリア教育の視点についての理解が深まった」	4名
・「キャリア教育の視点にたって授業を実践することが大事であると気づいた」	4名

次回研修に関する内容

・「実践に繋がる内容の第２回研修が楽しみである」	2名

研修プログラムに関する内容

・「価値観シートを活用するところで時間がもう少しほしかった」	1名
・「大きなテーマでの研修だったので、具体的なキャリア教育の形が見えにくかった」	1名

3．第２回研修ふり返りシート（16名）の記述内容

第２回(キャリア教育の視点を入れた指導案作成)ふり返りシートの記述を整理する。

キャリア教育に関連する内容

・「これからキャリア教育そのものとキャリア教育の視点を意識して実践したい」	11名
・「キャリア教育の視点を意識して普段の授業や教育活動を行うことの大切さに気づいた」	5名

研修で理解したことに関する内容

・「これまでやってきた教育活動がキャリア教育に関連していることが分かった」	4名
・「どんな教科・領域にもキャリア教育の視点が入れられることが分かった」	3名
・「教員が意識して授業を進めることでキャリア教育はできると分かった」	2名
・「キャリア教育の実践例を知ることができた」	1名

小学校教員である自分をふり返る内容

・「キャリア教育とこれまでの学習活動をもう一度整理し見直したい」	1名
・「キャリア教育についてもう少し詳しく知りたい」	1名
・「この研修で作成した指導案をもとに意欲的に取り組みたい」	1名
・「具体的に授業に生かす方法を考えたい」	1名
・「今までやってきたことを元にして今後も子どもたちとキャリア教育に取り組んでいきたい」	1名

その他の内容

・「作業・交流・まとめ・理論は研修の形として、主体的に取り組めたのでよかった」	1名
・意欲的に取り組める研修内容であり、自分でいろいろなことに気づくことができた	1名

Ⅵ　考察

1．研修に対する教員の意識の変容

（1）研修前後における受講者（18名）のアンケート

Table4 研修前・後アンケート設問①の結果によると、A小学校教員のキャリア教育への興味は、研修前から決して低くはない。多くがキャリア教育について興味を持っていたと言えるが、研修後はさらに若干その数値が増加した。

研修前･後における数値の差が最も大きい項目（0.7↑）は、③キャリア教育の視点を入れた授業、⑧キャリア教育で育成すべき力の認識、である。キャリア教育の基礎的・汎用的能力についての理解が進み、キャリア教育の視点を加えた授業についての捉え方や実践方法などの理解度が増したと考えられる。また、②小学校段階でのキャリア教育 、⑦学校における教育活動とキャリア教育との関連性も増加(0.5↑)し、⑤自分のキャリアを振り返る 、⑥自分のキャリアを教育活動に生かす、④キャリア教育の取組･実践例についての認識(0.2~0.3↑)には若干の増加傾向が認められた。アンケート結果からみると、本研修は、小学校教員がキャリア教育と教育活動との関連性を考えることに貢献し、小学校におけるキャリア教育の必要性の認識を高めることにも若干貢献したと思われる。

（2）第1回研修ふり返りシート（14名）

ライフキャリアレインボーの作成により、「自分の人生をふり返って」という記述が10名に見られた。一人の受講者は、ライフキャリアレインボーの役割の中の《学生》について、『学生である期間が短いことを視覚的に捉えることができた。しかし学生という立場で学んだことや経験したこと、人との出会いは、長い人生において大きな影響を与えるものであり、重要な役割を果たしている。教師である自分が子どもたちに与える影響について、これまでの言動行動をふり返り、これからできることについて考えたい』と述べた。受講者が自身をふり返り、そのことを通して教師の役割を再確認していることがわかる。

また、個人の気づきを全体で共有したことにより、キャリアの大切さを再認識し、キャリア教育について考えるきっかけとなったと考えられる。「他の先生の思いを知ることができた」「みんなで整理すると～」といった9名の記述から、グループ活動が有効であったことがわかる。【キャリア教育とキャリア教育の視点の理解］［キャリア教育の視点を入れた授業を実践する必要性の理解]という研修のねらいに関する記述から、キャリア教育に対する理解が深まったと考えられる。

記述内容から、受講者が研修に期待していることや、提供してほしい内容はさまざまであることも伺えた。それぞれ異なった評価(ふり返り)があり、今後の研修に繋がる課題も明らかになった。第2回以降では、これらの意見を紹介しつつ共有しながら進めることを意識した。

（3）第2回研修ふり返りシート（16名）

16名にキャリア教育に関連する記述として、教員自らがキャリア教育の視点を理解し、教育活動の実践に対して主体的に取り組む姿勢に繋がる内容が見られた。また10名には、研修によって、これまでの教育活動とキャリア教育との繋がりを確認したことや、キャリア教育やキャリア教育の視点と教科との関連性を考えたこと、キャリア教育の実践例を知ったこと、などについての記述があった。他に、教員である自分をふり返ったこと、キャリア教育とこれまでの学習活動を見直し整理したこと、キャリア教育をさらに深めたいという思い、実践への意欲など、研修をきっかけとして考えたことや次に繋がる実践についての記述もある。

これらの記述から、受講者一人一人がキャリア教育というものに関心を示し、その必要性を理解し、実践につなげようとする意欲が見られたと考えられる。

2．キャリア教育の視点を入れた授業に対する教員の意識の変容

研究授業における小学校教員の支援と手立て、児童の発言や様子からキャリア教育の視点と授業の関係性について考える。

（1）授業内容

授業者Bは、A小学校で初となるキャリア教育の授業において、自身にとって初めてであるキャリア教育の視点を入れた教科学習を計画し実践した。その際、留意した点として挙げたのは、児童の実態を踏まえた上で育みたい力を明確にすることであり、教科学習(算数科) の中にキャリア教育の視点を加えていくことを重視したことである。

Bは、児童のキャリア育成のために児童の姿を想定し今回新たに加えられた【キャリア教育の視点における支援と手立て】(Table2)を実際の教育場面で生かす試みとして、C組算数科で初めて【ⅱ)児童による課題設定】【ⅴ)グループ活動】(Table3)を導入した。

Bが、個人の課題解決において児童に提示したのは、【①視覚的に捉えられる立体模型】【②既習公式の掲示】(Table2)であった。日頃から算数に苦手意識を持っている児童らは、立体模型を見つめ、側面に掲示された既習の公式を何度も確認して問題に向き合っていた。グループ交流においてBが意図したことは [自分の考えに自信を持つ] [課題達成に至っていない児童が解決の見通しを持つ] (Table2)である。児童には、自分の考えを友だちに丁寧に説明したり、分からないことを互いに確認したりして理解に努めようとする様子が見られた。『わかった』を実感させたいというBの意図通りに授業が進んだと言える。

本時の最後で、キャリア教育で大切にされている『今の学びは次に繋がる・社会に繋がる』というキャリア教育の視点を意識した教員の働きかけ(問いかけ)が見られた。児童の「大きなビルの体積もわかる」といった、知識を実社会に応用することができるという発想や、「ビルを設計する時、きっと必要だよ」といった職業と関連づけしていく発言が促される授業になったことは、キャリア教育の視点を取り入れた成果である。「円柱の体積も求めたい」といった次の授業のめあてに繋がる発言もあり、次への探究に児童が目を向けていることが確認できた。キャリア教育を教員が意識し働きかけることが、重要な意味を持ったと考えられる。

（2）事後検討会

研究授業の事後検討会では、キャリア教育の視点をどのように学校教育に活かしていくかについて、その具体化に関する議論が活発に行われた。

参加教員の「児童の課題に向かう方法や手段、思考の流れもキャリア発達を見る視点となる」という発言からは、キャリア教育の視点を取り入れることによって、見過ごしがちであった児童の能力や成長過程を諮ることの重要性に気付いたことが伺えた。キャリア教育の視点を意識した指導を行う場合とそうでない場合を想定すると、「児童の育つ能力に差が出る」といった意見もあり、単に将来を考えるだけでなく、今ここにおける児童の育成にも繋がっているという気づきがみられた。児童が課題に向き合う際、児童の能力を育てる観点を大切にした、それぞれのキャリア発達に応じた教員からの支援、つまり、児童一人一人を大切に考える個に応じた指導が必要であることに教員自身が気づいたと思われる。

キャリア教育とは、小学校教員が、『児童が将来社会に出て生きていく』ことまで見据え

て、現在の児童に必要だと思われる力を育む教育であると捉えられた。その人が生きていく上で、必要かつ基本的なこととして、研修の活動において、あいさつ・言葉遣い・きまりを守る、などが挙げられた。それらの観点で実態を把握し、児童の将来に向けて育みたい能力を教員が継続的に働きかける必要があることも確認された。「今の学びが、社会に出たとき役に立つ」という気づきや、「キャリア教育の視点を意識することが大事である」といった発言からは、『なぜキャリア教育が求められているのか』という問いに、教員自らがその答えを内発的に導き出したと捉えることもできる。一方的な研修とは異なった、実感を伴う気づきにつながったと思われる。

また授業を見る過程で、C組児童の学習の姿に、「自分のクラスの児童を重ねて見ていた」、「キャリア教育の視点を入れ、意識した指導を行いたい」といった発言もみられた。キャリア教育の視点を導入した授業実践、教員の働きかけと児童の姿を観察したことにより、各自にキャリア教育を行うことを想定した実践の具体が見えてきたと考えられる。第3回研修は、各人にとって今後の授業に生かせるものとなったことがわかる。さらに多くの教員から、キャリア教育の実践に対する意欲と意気込みが語られた。

研修に参加した教員は、研修前の「キャリア教育をどのように行えばいいのか分からない」というレベルから、キャリア教育の視点を入れた授業に対する教員の意識は概ね向上し、キャリア教育の視点を入れた授業における具体的な実践内容や方針、また自分なりに理解したキャリア教育について考えることができるようになったと考えられる。

3. 研修後の授業に見られる教員の意識の変容

3回の研修後、A小学校では教員がキャリア教育を念頭に置くようになり、児童の実態から考えられた「児童につけたい力が明確になった」という意見が多い。また、「どの教科学習においてもキャリア教育の視点を入れることはできる」と考えられるようになった。その後、各学年でキャリア教育の視点を入れた授業が行われている。

授業者D(2年生)のクラスは、児童の『途中であきらめる』『自分の思いを伝えられずトラブルになりやすい』という実態が見られた。教育活動全般で『じっくりと物事に向き合う』『自分の思いを相手にわかるように伝える』ことが課題であると考え、キャリア教育の視点を取り入れて、算数で【人間関係形成能力；自分の考えを人にわかるように伝える力】をつけたい力として取り上げ、『答えに至った過程を友だちに伝えることを意識して話し言葉で記述する』を児童に試みた。これらの取り組みが、将来自分自身の考えを他者の立場

にも立ちながら伝えようとする児童自身の姿勢につながると考えたことで、Dは「児童にとって必要なことだ」という確信をもって取り組むことができたという。教員自身がキャリア教育とその視点を意識することで指導上の工夫が見られ、そこから新たな児童の姿と発言が導き出されたことは、大きな意味があり、Dは、「教育活動全般においていろいろな指導上の工夫と改善を行ってみる」と述べた。

現在、キャリア教育の視点を意識した教師による《児童が学んだことを自分の身の周りから社会に、そしてもっと広い世界へ目を向ける》ことを大事にした働きかけ（言葉・写真・映像・新聞・インターネット活用）が行われている。それらの教師の働きかけにより、児童は『もっと知りたい』『大人になったら』『将来役に立つ』と発言したり、学習した内容を新聞やニュースにある社会情勢と結びつけ語ったり、インターネットや本を活用し、より詳しく調べるなど、学びから新たな知識を得て、それを喜ぶ姿や、これまでと違う学習に対する意欲が見られるようになった。キャリア教育の視点を持つ教師の働きかけにより、児童の知的好奇心が喚起され、社会や将来に目を向けることや、学びの重要性と必要性を理解することに繋がったと考える。

Ⅶ　総合考察

本論では、小学校教員へのキャリア教育についての意識の向上と教育活動での実践をねらいとして行った研修について考察した。研修効果については、学校教育の中でもっとも多くの時間が費やされる授業を捉え、キャリア教育の視点を入れた授業実践の中にその分析を求めることとした。

本研修の内容は、研修受講後の授業実践までを含むものである。そのため参加教員に《主体的に取り組み、自ら気付く》といった意欲的な姿が見られたと考えられる。研修の結果、教員のキャリア教育とキャリア教育の視点を持って教育活動を行うことに対する意識の向上が見られ、実際の授業において児童の学習活動や自身の働きかけが工夫・改善された。

キャリア教育に対する意識が向上した教員の働きかけが、研修前と後で変化したことにより、これまで述べてきたように児童の授業や授業外で「学びを社会と繋ぎ、将来の自分の姿と繋ぐ」といった発言、会話、様子などの変化が見られるようになった。このような児童の変化は、教員の児童を見る視点の多様化・拡大化・深化をもたらせている。加えて、キャリア教育とキャリア教育の視点を持った教員の意識が、児童の将来の姿を意識した学習面・生活面における指導に繋がっていることも確認された。

キャリア教育の研修により、教員が児童の将来にまでも目を向け持続的に備わる能力を身に付けることを意識することにより、小学校において達成すべき様々な学習目標・生活目標の意義が裏づけされた。また、キャリア教育の視点を入れた教育活動は、児童の基礎的・汎用的能力の育成に繋がっていることも確認できたと思われる。

現在A小学校では、キャリア教育の視点が授業計画の中に組み入れられた形式で教育実践が進められている。そこでは児童のさまざまな思考の展開が生まれ、児童の言語活動など様々な実践的能力開発に結びついている。そこに見られる児童の姿や発言は、教員が児童をいろいろな側面から捉える視点にもなり、児童を捉えるそれらの視点は、一人ひとりのキャリア発達を促進することに繋がる要素を含んでいるとも考えられる。

この研究では、キャリア教育を教員が学ぶために『教員がキャリア教育の視点を持ち、児童の実態を踏まえて《めざす児童の姿》を明確にする。そして、児童に必要な力を育むための支援と手立てを幾通りも考え実践に繋げる』という内容を採用した。児童の将来の姿を見据えたキャリア教育は、さまざまな教育活動に応用されるという結果を得た。

キャリア教育の研修がもたらした効果を一連の過程として捉えると、キャリア教育の教員研修をスタートとして、教員の意識の変化が得られた。その教員の意識の変化により教育活動における教員の児童への働きかけが工夫・改善され、それに伴って児童の発言・様子に変化が見られるに至ったといえる。教員への働きかけは、結果的に児童に大きな影響を与えるものとなった。

次に重要であると思われるのは、教員が、変化の見られた児童の発言・様子を実態として捉え直し、新たな課題を発見することである。そこで教員には、再度、児童の将来につながる能力を育むことを意識して、更に工夫・改善した手立てや学習活動・教育活動を実践するといった循環過程を繰り返し展開していくことが望まれる。キャリア教育は将来に繋がる教育であることを教員が意識し、キャリア教育の視点を持って継続的に児童への働きかけを行うことが求められていると考えられる。

児童の将来の姿を意識してキャリア教育を継続的に・系統的に進めるためには、教員が再び自分自身に向き合うことを前提として、児童への教育活動を行うことが必要である。教員がキャリア教育の視点を入れた教育活動を、児童の発言や様子などから分析し、成果と課題を明らかにすることは、教育活動の工夫・改善に繋がり、キャリア教育を継続して行うための循環過程において重要な意味を持つと思われる。キャリア教育の視点を持った教員が、自身の教育活動をリフレクションすることにより、成果と課題の明確化が行われ、

児童の新たな課題に対する教員の新たな働きかけが期待でき、教員としての力量を高めることにも繋がる。常に課題意識を持ち、教育活動を見直し、工夫・改善することで、教員が学び続けることが大切である。加えて、教員が、児童へのキャリア教育を行いながら、自分自身の教員としての力量も高められブラッシュアップすることは、同時に将来に繋がる自分自身へのキャリア教育も同時に行うことでもあると考えられる。

文部科学省(2011)は、『自分が自分として生きるために、「学び続けたい」「働き続けたい」と強く願い、それを実現させていく姿がキャリア教育の目指す子ども・若者の姿なのである』と述べている。本研究では、研修により教員のキャリア教育への意識が向上し、その意識の向上を教育現場における実践と結びつけることで、児童へのキャリア教育に繋がると考えた。学びを広い視野で捉え、生活や社会に活かす、自分の将来に活かすことを児童に意識させ続けることがキャリア教育につながる。教員が「教育活動全般においてキャリア教育を進めることは、児童の社会的自立・職業的自立に必要な能力を育てることである」といった意識をもち、教師自身も児童と共に歩んでいくことが肝要であると思われる。

Ⅷ　おわりに

研究指定校やモデル校でなければ、キャリア教育自体が小学校教員に浸透することは難しい現状である。しかしA小学校においては、研修により教員の意識が向上し、徐々にキャリア教育の必要性を理解し実践を行うに至った。

本研究で取り組んだ研修の手順をAppendix9に示す。キャリア教育の校内研修への活用が期待される。今後は他の都道府県とも情報交換しながら学校教育におけるキャリア教育の充実を考え続けたい。小学校におけるキャリア教育の推進に繋がる実践を増やし積極的に発信していきたいと考えている。

〈引用文献〉

- 中央教育審議会(2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」ぎょうせい
- キャリア教育における外部人材活用等に関する調査研究協力者会議(2011)「学校が社会と協働して一日も早くすべての児童生徒充実したキャリア教育を行うために」
- 京都市総合教育センター研究課(2012)平成23年度第13回教育研究発表会
- 文部科学省 国立教育政策研究所 (2010)学校におけるキャリア教育に関する総合的研究『学校におけるキャリア教育支援に向けて一協働で取り組むカリキュラムづくりを目指して一』p. 3
- 文部科学省(2011)キャリア教育に関する調査
- 文部科学省(2011)小学校キャリア教育の手引き〈改訂版〉教育出版
- 文部科学省 国立教育政策研究所 生徒指導研究センター(2009)「自分に気付き、未来を築くキャリア教育－小学校におけるキャリア教育推進のために－」
- 文部科学省 国立教育政策研究所 生徒指導研究センター(2010)「キャリア教育のススメ」
- リクルート(2010)「2010年　高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」報告書
- Super, D. E. (1986)「A life-span, life-space approach to career development」Career choice and development. : Applying contemporary theories to practice. JOSSEY-BASS

Appendix 1　第１回研修スケジュール

時間	研修内容	研修方法
１３３０	研修前のアンケート記入（研修に対する期待）	
１３３５	１研修オリエンテーション（本時のねらい・スケジュール）	キャリアレインボー
１３４５	２自分自身の人生を振り返ってみよう！（ライフキャリアレインボー・ 価値観シート）	シートの作成（個人）
	３目の前の子どもたち「伝えたいメッセージ」「どんな子どもたち？」「必要な力･育てたい力」	個人・グループ活動
１４５５		P.P 視聴
１５００	今日の研修をふり返って（ふり返りシート記入）	個人・全体交流

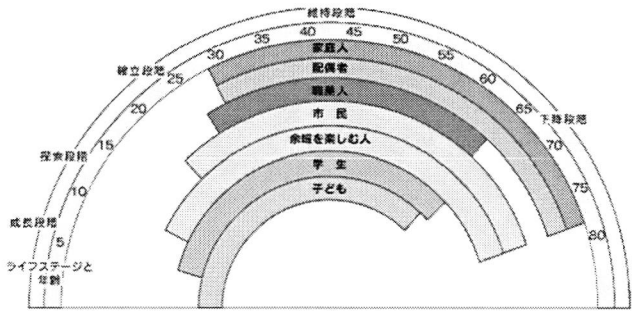
Appendix 2　研修のねらいと学習目標・行動目標

研修のねらい『キャリア教育の研修により、小学校におけるキャリア教育とキャリア教育の視点を理解し、実践に繋ぐ』

《学習目標》・自分のキャリア(これまで生きてきた自分史)をふり返り、子どもたちへの教育活動につなげる。
・キャリア教育とキャリア教育の視点について,理解を深める。

《行動目標》・キャリア教育の視点を入れた指導案作成を行う。
・キャリア教育の視点をもち、教育活動（授業）を行う事ができる。
・キャリア教育の視点にそって、授業や教育活動の評価を繰り返し行い、子どもたち一人一人を大切にした将来につながるキャリア教育を行うことができる。

Appendix 3　ライフキャリアレインボー(Nevill &Super,1986)



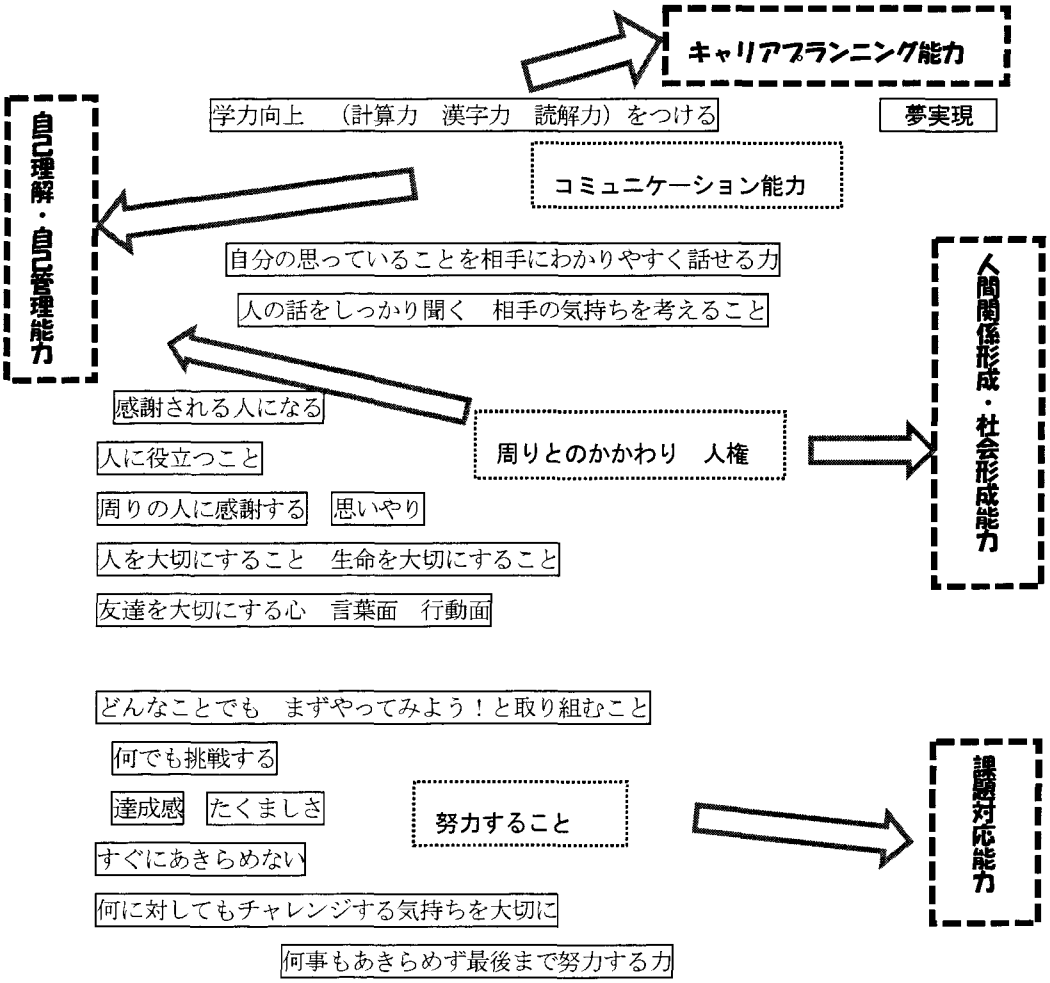
【ライフキャリアレインボー作成手順】
人生における役割を当てはめ、その役割が識別できるように彩色する。

留意点
・役割にふさわしいと思う色を各自が選択する。
・役割の占める割合や比重を視覚的に捉えるために色の濃淡をつける。

Appendix 4　価値観シート

評価	美	工夫	得意な仕事	自分なりの生き方	興奮
中庸	権威	地域社会	スリル	愛	快適な労働環境
健康	権力	援助	感覚	奉仕	ボランティア
達成	独立	意義	マネジメント	面白さ	寛容
発陽動見	野外の仕事	価値観の合う人	学習	所属意識	体力
リーダーシップ	成長	好奇心	付き合い	義務	社会秩序
謙虚	影響	自己責任	環境保護	平等	金
責任	変化	自律	丁寧	地位	ライフプラン
調和	経済面の安心感	内面生活の豊かさ	キャリアアップ	努力	獲得
正義	自由	経験	能力	家族	時間裁量
昇進	公平	趣味	チャレンジ	安定	

Appendix５　子どもたちに必要な力、育みたい力（グループによる成果物）



Appendix６　第２回研修スケジュール

時間	研修内容	研修方法
１０３０	研修前のアンケート記入（研修に対する期待）	ＰＰ視聴
１１００	１研修オリエンテーション（第１回研修のふり返りから）	
	２キャリア教育って？	グループワーク個人
	３指導計画・指導案を作ってみよう（授業の中にキャリア教育の視点を取り入れる）	全体交流・共有
１１５５	４指導案から見えてくること	個人・全体交流
１２００	５今日の研修を振り返って（アンケート・ふり返りシート記入）	

Appendix７　第３回研修のスケジュール

時間	研修内容	研修方法
１４００～１４４５	１　算数科　６年生　立体の体積	授業参観
１５００～１７００	２　事後検討会	全体討議

Appendix８　６年算数科　指導案

学習活動	おもな発問（◎中心になる発問） ・予想される子どもの反応	○支援・留意点 ◆キャリア教育の視点における支援と手立て	評価の視点・方法 キャリア教育の視点
意欲 1．前時のふり返り （1分）	○前時にわかったことはなんでしたか。 ・直角三角形が底面になっている三角柱の体積の求め方	○前時の学習内容を掲示しておき，ふり返れるようにしておく。	
2．課題設定 （2分）	○今日はどんなことを学習しますか。 ・三角柱の体積を求める ・四角柱の体積を求める ・円柱の体積を求める 三角柱の体積はどうすれば求められる？	○意見が複数出れば，否定せずに今日はどれから学習するのがよいか考えられるようにする。	【課題発見能力】 単元の学習の見通しをもち，適切に課題を設定している。
方法 3．学習方法設定 （2分）	○どうすれば考えられそうですか。 ・底面積に高さをかける ・単位立方体で考える	○この場合も底面積×高さで体積が求められるのかを調べるようにする。	
4．問題把握 （2分） ・P16 3 の底面が直角三角形でない三角柱の体積を求めるという課題を把握する。	○P16 3 の問題を読み，ノートに書きましょう。	○空間イメージをとらえにくい子には，立体模型を準備しておき，課題が把握しやすくなるようにする。 ◆課題解決の見通しがもてていない児童には，２つ分を組み替えると直方体になることが視覚的にとらえられるように，立体模型を準備しておく。	
5．自力解決 （3分）	◎ノートにP16 3 の問題を解きましょう ・直方体の半分であることを用いて三角柱の体積を求める。 ・「底面積×高さ」を用いて積を求める。	◆課題解決に必要な既習内容の定着が十分でない児童には，必要な内容が確認できるように公式を側面掲示しておき確認するように促す。 ◆全体では発言する自信をもちにくい児童が，グループで話すことで自信をもてるようにする。 ◆自力解決の時間では解決できなかった児童には，友達の意見を近くで聞くことで解決の見通しをもつことができ，集団解決の時の理解につながるようにする。	【自己理解能力】 今までの学習をもとに，可能性を信じて課題に向かっている。 【人間関係形成能力】 自分の考えを，相手意識をもってわかりやすく説明している。
出会い 6．グループ交流 （7分）	○自分の考えをグループで交流しましょう。	○「底面積×高さ」としても直方体の半分としても，計算の答えが同じになることに気付くようにする。 ○三角柱の底面積は，三角形の面積の公式を用いていることに気付くようにする。 ○面積では，どんな多角形でも三角形に分けて考えれば，面積が求められたことを思い出せるようにする。	【課題解決能力】 集団解決を通して課題についての友達の考えを聞き，自分の考えに生かしている。 ・角柱の体積を「底面積×高さ」と考えて求めることができる。（ノートへの記述）
7．集団解決 （17分） ・どんな角柱でも，三角柱に分けて考えることで「底面積×高さ」で求められることを導き出す。	○自分の考えを発表しましょう。 ・「底面積×高さ」で求められる。 ・直方体の半分で求められる。 ○三角柱が求められることで，工夫すれば求めることが可能になる立体にはどんなものがあるでしょう。 ○ノートにP16④の問題を解きましょう。 ・㋐三角柱２つに分けて，公式を使って解く。 ・㋑向きをかえて三角柱とし，公式を使って解く。	○底面がどこになるのかを考えてから，体積を計算するように助言する。 ◆学習内容と実際の生活と少しでもつながるようにする。 ○「底面積」をキーワードにふり返りを書くようにする。 ○数人発表　次時の課題につながるようにする。	【課題発見能力】 単元の学習の見通しをもち，適切に課題を設定している。
8．適応題（6分） ・P16④の角柱の体積を求める問題に取組む。	○どんなものの体積が求められるようになりましたか。 ○学習のふり返りをノートに書きましょう。		
波及 9．ふり返り（5分）			

Appendix 9　研修手順（第１回研修の手順）

ライフキャリアレインボー作成【作成手順　Appendix3 】

虹の色のように８つに区分けされた半円が描かれたシートに、人生における役割（Nevill &Super,1986）を当てはめ、それぞれの役割が識別できるように彩色する

価値観シート【実習手順】

ここで「人生を進めていくにあたり、何に価値を置くかということには、個人差があります。また、その基準は多様です。自分の価値観を整理して、自分のありようを考え直すことは意味深いと思います。先ほど作成したライフキャリアレインボーも参考にしながら、人生における価値を表すさまざまなキーワードを見つけ出しましょう」と実習のねらいを参加者に示した。次にシート（Appendix4）を提示しながら、**「人生を生きていく上で、必要なことや大事なことは何だと思うか」**という問いかけ文を読み上げ、「あなたがこの問いに答えるために、役立つと思われるキーワードは何でしょうか。シートに記載されている６５の単語や言葉はこの問いの答えを考えるための参考にしてください。必ずしも、これらの言葉を使って自分の価値観を説明する必要はありません。自分のキャリアを進めるうえで、大切だと思われるキーワードが見つかれば、右のふきだし部分にメモをしてください。」と指示して、各自の価値観を考える時間を作った。価値観シートは、自分が大事にしていることや大切だと思っていることについて、考えを広げ深めながら、忘れかけていたことを思い起こしたり、新たな価値に気づいたりするために用いた。この作業は、個人の価値観を自分自身でみつめなおすことをねらいとしたため他者との交流を前提とせず、個人作業とすることを前提とした。しかし、これらの作業を他者と分かち合いたいという希望を制限することはせず、シートへの記入後の参加者間の話し合いは自由とした。

子どもたちへのメッセージ【実習手順】

最初に、「これまでの実習では、自分自身のキャリアについてふりかえり、自分自身の人生でみなさん自身が大切に思っていることなどを再確認してきました。これからは、これまで気づいてきたことをもとに、子どもたちへ伝えたいメッセージを考えてもらいたいと思います。」と教示し、実習のねらいを示した。次に、「これまでの実習をふり返って、子どもたちにどのようなことを伝えることが大切だと皆さんは思っているでしょうか。子どもたちへのメッセージを文章にしてみましょう。」と伝え、ワークシートに記述するよう受講者に促した。この実習は各自が自分一人でじっくり考える活動とし、次の実習「目の前の子どもたちを見つめて」につなぐ内容とした。

目の前のこどもたちをみつめて【実習手順】

「今、子どもたちへ伝えたいメッセージをそれぞれ書いてもらいました。次に、身近なところに存在する子どもたちに目を向けてみたいと思います。」と受講者の意識をＡ小学校の子どもたちに向くようにした。そこで、「毎日関わっているＡ小学校の子どもたちは、どんな子どもたちなのでしょうか。子どもたちの様子や保護者との関わりを思い起こしてみて下さい。どのような子どもたちであるとそれぞれが捉えて日々の教育活動を行っているのでしょうか。」と問いかけた。少し時間をとり受講

者に考える様子が見られたところで、「目の前の子どもたちを見つめて、その実態について自分なりに思いつくまま書いて下さい。いくつ書いてもかまいません。」と実習課題を示した。

子どもたちに必要な力・育みたい力【実習手順】

「先ほどの活動でA小学校の児童の実態が全体で共通理解できたように思います。次に、その児童の実態を踏まえた上で、その子どもたちがこれから社会に出て生きていくために必要だと思われる力や、自分たちが子どもたちに育んでいきたい力について考える時間にしたいと思います。」と次の実習課題のねらいを示した。「まず、自分が考える子どもたちに必要な力・育みたい力を付箋に書き出してみましょう。」と作業を促した。しばらく時間が経過した後、「4つのグループに分かれて下さい。今皆さんが付箋に書いた物をもとに、グループの中で共有し、似たような力ごとに分類してみて下さい。」と次の作業手順を示した。全体を見回しグループ内における活 動が一段落したところで、「最後にキャリア教育でつけなければならないと言われている能力について説明を行いますので、グループで作成した成果物と照らし合わせて下さい。」と基礎的・汎用的能力を図にまとめプレゼンテーション資料を提示し解説を加えた。

第2回研修の手順

キャリア教育って？【実習手順】

受講者に、「今から、5年生理科の指導案をお見せします。みなさんがよくご存じの指導案です。」と受講者と同じ従来からある形式の教科指導案をスクリーンに映した。次に「児童の実態を踏まえてキャリア教育の視点を取り入れた場合、指導案の内容のどこをどのように見直すのか、学習活動がどのように変わるのか、その際どんな支援や手立てが考えられるのか、一例をお見せします。」として、教科のねらいにキャリア教育の視点を加えたものを提示、「それを達成するために、どのような学習活動が考えられるのでしょうか。」と問いかけ、学習活動の見直しと変更箇所を示し最後にねらいに沿った評価の説明を行った。

指導案作成において　【作成手順シート】

個人指導案作成用	学年指導案作成用
児童に付けたい力	児童に付けたい力
キャリア教育の視点（評価の視点） （学習場面における具体的な子どもの姿）	教科・領域
学習活動の変更	キャリア教育の視点 （学習場面における具体的な子どもの姿）
キャリア教育の視点における留意点	